日本人のための日本語マニュアル

Japanese Language Manual for Japanese Writers

東京工科大学名誉教授／一般財団法人日本特許情報機構　特許情報研究所顧問　**横井　俊夫**

PROFILE　1966 年に電気試験所（現在：産業技術総合研究所）。1982 年より第五世代コンピュータプロジェクトを推進。1987 年より電子化辞書プロジェクトを推進、運営。1995 年よりフィリピン国 ODA プロジェクトを推進、指導。1997 年より東京工科大学。2008 年より一般財団法人日本特許情報機構　特許情報研究所顧問。東京工科大学名誉教授、工学博士。

yokoi@stf.teu.ac.jp

自分が書いた日本語文章を対象化し客観的に分析できるようにする能力を養成し鍛え上げる。そのために日本人のための日本語マニュアルを作成する。昨年の Japio YEAR BOOK 2013 で、筆者は、産業日本語のガイドライン策定［1］を提案したが、ガイドラインの骨格となるのがこの日本人のための日本語マニュアルである。

本マニュアルは、いわゆる文章術、すなわち、こうすれば良い日本語文章になりますという文章術を説くものではない。日本語がどのようにして情報を表現し伝えるのか、日本語における情報表現と情報伝達の仕組みを説くマニュアルである。そして、その仕組みの理解に基づいて、日本語文章を対象化し客観的に分析できるスキルを鍛え上げるマニュアルである。表現し伝えたい情報に対して、日本語文章が適切であるか否かを手順立って判断できるようにし、不適切な箇所を見つけ出し適切な表現に言い換えるスキルを鍛え上げるマニュアルである。そして、マニュアルというからには、利用者にスキル向上を十分に約束できるものでなければならない。

1　日本語マニュアルとは

Japio YEAR BOOK 2013 の寄稿［1］にも述べたように、日本人は、日本語を使うことはできるが、日本語そのものについて知っているわけではない。すなわち、日本人の日本語に係わる知識は、自覚的なものではなく、暗黙知の領域にある。これは、日本人や日本語に限ったことではない。いかなる言語についても、母語話者は、母語を使いこなせるが、母語について知っているわけではない。ちなみに、日本人は、英語を使いこなすのは苦手であるが、受験勉強のおかげで英語そのものの知識は、英語母語話者より勝っているといえる場合も多い。

そこで、日本語について知りたいという日本人のニーズは大きい。その大きさの反映として、寄稿［1］の末尾に、付録「産業日本語関連に関わる出版物」を挙げた。毎年、実に沢山の日本語文章術指南書や関連する書籍が出版されている。ICT 時代の知的作業スキルアップの各種ノウハウ本の中でも、日本語について知りたい、文章作成能力を向上させたいというニーズに応える指南書の多さは、かなり目立つものがある。

ただ、この沢山の文章術指南書を読み比べてみると、その内容の多くが繰り返しであることが分かる。見方の違いや例文の違いはあるものの、基本的な文章術ルールやその取上げ方にはさしたる違いがない。物理学者であった木下是雄氏が書いた「理科系の作文技術」［3］と新聞記者であった本田勝一氏が書いた「日本語の作文技術」［4］、この 30 年以上前に出版された 2 冊の指南書の焼き直しである。もちろん、それぞれの指南書は、それなりに新鮮であり、文章実務家たちの実体験に基づいた説明は、それなりに説得力がある。しかしながら、木下是雄、本田勝一両氏の 2 冊の繰り返しであることは否めない。実は、この 2 冊、いまだに売れている超ロングセラーである。

さらに、今までの文章術指南書には、共通の課題がある。指南書のルールや例文を読んだ時には、一応は納得できるものの、実際の文章に適用しようとすると、意外にどうしようもなくなるものが多い。多くは、改善ルールの大まかな説明と改善例が挙げられているだけであ

る。何故、そのような改善ルールが必要なのか、何故、そのような改善ルールが妥当であるといえるのか、原理的な仕組みに基づく説得力のある説明がない。したがって、改善ルールと改善例だけでは、多様に変化する実際の文章にどう適用してよいのか判断のしようがなくなる。

例えば、「文は、短くかけ」、あるいは、「文は、○○文字以内に書け」というルールがある。とりあえず、文が○○文字以上になっているか否かは容易に判断できる。しかし、文を短くする短文化には、文という単位が情報表現の上でどのような役割を担っているのか、一文で表現されている情報と多数の文で表現されている情報の違いは何なのか、文を短くする言い換え手段にはどのようなものがありどのような適用条件が求められるのか、等々の言葉に関する知識が必要である。最近の学生たちのだらだらと続く稚拙な長文とは違って、しかるべき大人が書いた長文にはしかるべき理由がある。短文化の下手な強制は、かえって非明晰な文章を増殖させることになる。

日本人のための日本語マニュアルは、今までの文章術指南書とは異なるものにしたい。ルールを列挙して文章の書き方を指南するのではなく、日本語の仕組を説明することによって、文章を対象化し客観的に分析できるスキルを指南するものにしたい。それぞれの産業技術文書は、それぞれの目的に即した文章特性をもつ。好ましい文章の基準も文書ごとに、あるいは、ひとつの文書の部分ごとに異なる。望まれる文章の基準作りは、それぞれの文書に即して行われるべきである。そして、色々な基準に共通的に対応できるスキルとして、日本語文章の分析スキルを指南する日本人のための日本語マニュアルを用意する。

実は、この 20 年間の間に、このような日本語マニュアルをまとめ上げるための多くに蓄積がなされたのである。大きくは、次の 3 点の蓄積である。

（1）言語学における蓄積

今世紀へと世紀が切り替わる頃を境にして、理論言語学の時代が一段落する。理論言語学は、形式的な理論モデルを用いることによって、文を主対象とする構文論の定式化に成果を挙げた。ただし、理論的な枠組みを堅持するあまり、日常的な言語直感からかけ離れた議論が多くなされた。これに対して、人間の認知の仕組から取り組む認知言語学、社会的コミュニケーションの仕組から取り組む機能言語学、言語どうしの包括的な対照に取り組む対照言語学等々の新たな蓄積がなされてきている。これらの蓄積は、我々の言語直感に素直に沿い、言葉の仕組を分かり易く体系的に説く手立てを提供してくれる。

（2）日本語教育における蓄積

外国人に対する日本語教育では、日本語を国語としてではなく、コミュニケーションツールとして教える。日本人に対する日本語教育、すなわち、国語は、日本語文化、日本の言語的文化、日本文化の教育に主眼がある。この教育自体は、非常に重要である。国語における一般的な言語スキル教育としては、漢字の字数や語彙の数を増やすということが含まれる。それ以外は、国文法の一端を教えるに留まっている。また、国語教育と英語教育との間には、言語に関する教育としての連携の仕組がない。一方、異文化圏の外国人に対する日本語教育では、日本語教育をコミュニケーションスキル教育であると位置づける。その観点から、国語学とは異なる新たな日本語学としての蓄積がなされてきている。

（3）言語処理における蓄積

情報処理技術において（自然）言語処理技術は、その役割を増し、多くの技術成果を得るに至っている。形態素解析、構文解析、述語項構造解析、照応解析等の要素的解析技術、そして、情報検索、機械翻訳、自動要約、情報抽出等のテキスト処理技術、多彩な技術が進展している。近年においては、ビックデータとそれに対する統計手法や機械学習によって、人知を超えて言語現象を捉えることも可能になりつつある。しかしながら、テキスト処理システムの精度は、平均的にみると 60%程度止まりというのが現状であるといわれている。あるがままの言語現象を対象にする言語処理技術に対し、言語処理を高精度化するための日本語という観点も加味すべき時が来たようである。言語処理技術の実態が明らかになりつつあることから、言語処理に適切に対応できる日本語の仕様の検討も始めれるようになってきている。

以上の蓄積は、そのままではマニュアルには適さない。これらの蓄積を整理し、組み直してマニュアル化する作

業が必要である。その作業の要点を以下にまとめる。

（1）言語学の蓄積に対して

言語学は、観察し分析し理論立てるときの確実さを基準に言語現象にアプローチする。そのアプローチに基づいて、言語現象を、形態、構文、意味、語用という階層に切り分ける。一方、日本語マニュアルでは、情報の表現と伝達という言語機能の観点から、情報構造の構成の仕方からアプローチする。そのようなアプローチに基づくものとして、石黒　圭氏による文献［5］から［9］が大いに参考になる。また、日本語と英語との対照という視点を踏まえるものとして、猪野真理枝、佐野　洋両氏による文献［10］と［11］が大いに参考になる。この文献に関しては、「III 連用修飾編」と「IV パラグラフ編」が続けて刊行されるとのことである。

（2）日本語教育の蓄積に対して

日本語教育の仕方は、外国人に対するのと日本人に対するのとでは異なる。日本人は、日本語を使え、日本語としておかしいというような文章を書くことはない。したがって、外国人のための日本語教育の多くは不要である。日本人のための日本語教育は、日本語の仕組を学ぶことによって、より高度に、より適切に日本語を使えるようにすることである。外国人に日本語を教える際のノウハウではなく、日本人である日本語教師に教え方を教える際のノウハウの方が役立つ。例えば、文献［12］と［13］などである。

（3）言語処理の蓄積に対して

言語処理技術の現状を正確に包括的に把握するための努力が始まっている。例えば、Project Next NLP（https://sites.google.com/site/projectnextnlp/）である。また、利用現場での個々の利用体験に基づく知見の蓄積･整理も行われている。それらの努力や知見を（1）や（2）の蓄積と照らし合わせながら、情報検索に適した日本語、機械翻訳に適した日本語、自動要約に適した日本語等々を検討していくことになる。また、そこには新たな言語処理の課題も生まれてくる。例えば、ブラックボックス化された機械翻訳システムをインタラクティブ化するという課題、本マニュアルに基づく新たな日本語ライティング支援システムを開発するという課題､等々である。

本マニュアルは、良い日本語文章の書き方を説くいわゆる文章術指南書ではない。色々な文章術の共通の土台となる日本語スキルのためのマニュアルである。日本語の仕組、すなわち、日本語がどのようにして情報を表し伝え、日本語からどのようにして情報を読み取るのか、その仕組みに基づいて日本語スキルを説くマニュアルである。そのためには、どのように日本語にアプローチするのか、どのような日本語の側面を検討するのか、その要点を以下に整理する。

① 産業技術文章の様々な文章特性に即した日本語の特性を明らかにする。文章特性が、快適さを旨とするのか、正確さを旨とするのか、厳密さを旨とするのか､それぞれの文章特性に対応した日本語である。

② 文章作成の各フェーズに対応する日本語の特性を明らかにする。試みる日本語、表わす日本語、伝える日本語、訳せる日本語、作成フェーズのそれぞれに対応する日本語である。

③ 翻訳できる､翻訳しやすい日本語（訳せる日本語）の特性を明らかにする。英語に翻訳し易い日本語、中国語に翻訳し易い日本語、韓国語に翻訳し易い日本語、あるいは、多くの外国語に共通的に翻訳し易い日本語である。

④ 様々な表現メディアと連携する日本語の特性である。数式や図表や写真などと効果的に連携機能を果たせる日本語である。

⑤ 外国人にも理解できる日本語の特性を明らかにする。日本語能力試験（JLPT）の各レベル（N1 ～ N5）に対応した日本語である。

⑥ テキスト処理の処理精度を向上させる日本語の特性を明らかにする。情報検索に適した日本語、機械翻訳に適した日本語、自動要約に適した日本語等々である。

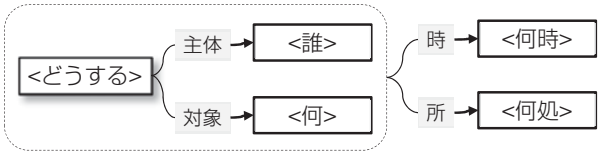
2　日本語マニュアルの作成

日本語マニュアルの一端を紹介しておこう。限られた紙面での紹介であるため、典型的な部分に絞り、端折った説明となっている。例文も、良く取り上げられる簡単な理解し易いものを用いる。日本語の仕組を他言語の仕

組と対照させながら説く。他言語としては、少なくとも、英語、中国語、韓国語を取上げたいが、筆者の外国語能力の限界から、英語と一部中国語に留める。

2.1　事象構造

言語が表現する情報の基本要素となるのが事象（出来事）である。事象には、動的な事象と静的な事象がある。動的な事象は、日本語文風に表現すれば、「何時に何処で誰が何をどうする。」である。日本語から離れ、言語ニュートラルに表現すると以下のグラフ形式表現となる。事象の骨格部分は、基となる＜どうする＞とそれに緊密に関わる＜誰＞と＜何＞によって構成される。＜何時＞と＜何処＞は、事象が起きる状況を表し、骨格部分にゆるく関わる。



すべての言語は、情報を線状に表現する。文字言語より音声言語の方が優位にあるからである。発声器官や聴覚器官は、線状に発声し、線状に聞き取ることを求める。上記のグラフ形式表現をどのように線状化するのか、言語ごとによって異なってくる。まず、日本語である。

「＜名詞 - 何時＞＜助詞 - 時＞＜名詞 - 何処＞＜助詞 - 所＞＜名詞 - 誰＞＜助詞 - 主体＞＜名詞 - 何＞＜助詞 - 対象＞＜動詞 - どうする＞。」

例えば、「今日書店で先生が本を買う。」である。網掛け部分が事象の骨格部分に対応している。＜助詞＞が縮小表示されているのは、単独で意味を担える単語ではないからである。＜名詞＞等の他の単語に張り付いて、関わり方の情報を追加する役割を担う。＜詞 - 名詞等＞＜辞 - 助詞等＞という組合せは、文節と呼ばれ、日本語特有の構成単位となる。この＜辞 - 助詞等＞の機能によって、文節を必要に応じて自由に入れ替えることが出来ること、文脈から読み取れる文節は省くことが出来ることなどの日本語のメリットが得られる。ただし、このメリットは、文節を省略しすぎて、文脈に依存しすぎる表現となるというデメリットにもなる。

骨格成分となる網掛け部分がコンパクトに纏まっていれば、線状形式表現からグラフ形式表現を読み取ることが容易となる。すなわち、明晰な線状形式表現となる。長い連体節で修飾された＜名詞 - 何＞は、網掛け部分のコンパクトさをひどく損なうことになる。その場合は、＜連体節 - 長い修飾＞＜名詞 - 何＞を文頭に移動させ、読点で区切り移動させたことを明示する。

次に、英語である。

“＜名詞 - 誰＞＜動詞 - どうする＞＜名詞 - 何＞＜前置詞 - 所＞＜何処＞＜前置詞 - 時＞＜何時＞.”

例えば、“＜冠詞＞ teacher buys ＜冠詞＞ book in ＜冠詞＞ bookstore today.” である。同じく、網掛け部分が事象の骨格部分に対応している。＜動詞＞の前と後という位置によって、＜名詞 - 誰＞が主語であること、＜名詞 - 何＞が目的語であることが示される。したがって、日本語の文節のように順番を入れ替えることはできない。また、文脈から読み取れるからといって省くこともできない。

位置に縛られるという固い仕組に対応するため、英語は代名詞を発達させた。“I” は、話し手・書き手に共通的に付けられるラベルである。“you” は、聞き手・読み手に共通的に付けられるラベルである。“it” は、傍らに在る物に共通的に付けられるラベルである。このラベル付けは、如何なるときも義務的に守らねばならない。“I love you.” は、「愛している。」である。この言葉が発せられる状況では、話し手、聞き手は自明である。“I” と “you” は、形式的なラベルであり、大きな意味を担っているわけではない。日本には、英語のような代名詞はない。日本語で代名詞と呼ばれているのは、既出の概念を参照するために使われる名詞である。

「僕は、ウナギだ。」の直訳英文 “I am an earl.” は、和文原文と同じ意味にはならない。文脈参照用の名詞である「僕」と一人称のラベルである “I” の違いが影響している。父親が子供に向かって「父さんは、母さんを愛している。」と話しかけたとする。この英訳は、“The father loves the mother.” ではない。“I love your mother.” である。母親が隣にいる場合は、“I love her.” である。名詞で参照する日本語とラベルの使用を

義務付ける英語の違いである。論文などで叙述の客観性を強調したいときは、英語においても、“I” や “we” ではなく “the author” や “the authors” が用いられる。

なお、＜前置詞＞は、単独で意味を担える単語である。＜動詞＞と＜前置詞＞で句動詞と呼ばれる複合的な動詞が作られる。日本語の助詞にはそのような機能はない。かわりに日本語では、＜動詞＞と＜動詞＞をつなげて複合的な動詞が作られる。英語の動詞では、ごく限られたつなげ方しか許されない。

同じく、骨格となる網掛け部分がコンパクトに纏まっていれば、明晰な線状形式表現となる。英語の修飾節は被修飾語の後ろにおかれる。したがって、日本語と違って、＜名詞 - 何＞の長い連体修飾節は、網掛け部分のコンパクトさを損なうことはない。一方、＜名詞 - 誰＞の長い連体修飾節は、コンパクトさをひどく損なうことになる。長尺の主語は、英文には馴染まない。

次に、中国語である。

「＜名詞 - 誰＞＜介詞 - 時＞＜名詞 - 何時＞＜介詞 - 所＞＜名詞 - 何処＞＜動詞 - どうする＞＜名詞 - 何＞。」

例えば、「老師今天在書店買書。」である。同じく、網掛け部分が事象の骨格部分に対応している。＜動詞＞に対する位置によって、＜名詞 - 誰＞の関わり方、＜名詞 - 何＞の関わり方が示される。ここは、英語と同じである。ただし、状況成分である＜名詞 - 何時＞と＜名詞 - 何処＞は、主語と動詞の間に置かれる。なお、中国語は、漢字一文字が一単語であり、ほとんどの複合語が漢字二文字である。

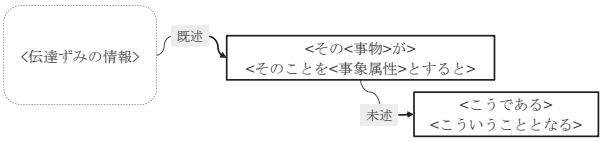
中国語では、骨格となる網掛け部分がコンパクトには纏まっていない。その違和感を解くのが＜介詞＞である。＜介詞＞は、＜前置詞＞と同様に、単独で意味を担う単語である。そして、動詞由来の単語である。＜介詞＞を＜動詞＞とみなすと、以下のように言い換えられる。状況成分は、＜名詞 - 誰＞を共通の主語とする連用節とみなすことが出来る。

「＜名詞 - 誰＞ ＜動詞 (介詞)- 在＞＜名詞 - 何時＞＜動詞 (介詞)- 在＞＜名詞 - 何処＞ ＜動詞 - どうする＞＜名詞 - 何＞。」

例えば、先の例を上記の形式とみなして漢文訓読調に読むと、「老師（先生）が、今天（今日）に在りて、書店に在りて、書を買う。」となる。

2.2　伝達構造の表現

言語が表現するもうひとつの基本構造が事象表現をどう伝えるか、どう読み取らせるかという伝達の構造である。言語表現は、伝達ずみの情報（すでに書かれた部分、すでに読まれた部分）の中の部分情報（既述情報）に対して、新しい情報（未述情報）を付け加えるという仕組によって事象を伝達していく（読み取らせていく）。既述情報は、＜事象＞を構成する＜事物＞である場合と＜事象＞そのものである場合に大きく分かれる。両者を含めて、以下のような言語ニュートラルなグラフ形式に表現することが出来る。なお、情報伝達を書き手と読み手の間の擬似的対話とみなすことも出来る。その場合は、＜既述＞を＜問い＞、＜未述＞を＜答え＞と読み替える。この考え方に基づくのが筆者の提案による構造化言語［2］である。



以下では、＜事物＞を対象とした場合を取上げる。なお、＜事象＞を対象とする場合は、既述（＜そのことを＜事象属性＞とすると＞）は接続詞に対応付けることが出来る。例えば、「＜そのことを原因とすると＞」は、接続詞「だから」「したがって」「ゆえに」「よって」「そのため」「それで」などに対応付けられる。まず、日本語である。（1）での事象表現の内で、＜名詞 - 何＞を既述とし、それ以外を未述とすると、以下のように線状化される。実線下線部が伝達ずみ情報を参照する既述部分であり、波線下線部が新しい追加情報となる未述部分である。既述部分は、原則として、文頭に置かれる。

「＜名詞 - 何＞＜主題化辞＞、＜名詞 - 何時＞＜助詞 - 時＞＜名詞 - 何処＞＜助詞 - 所＞＜名詞 - 誰＞＜助詞 - 主体＞＜動詞 - どうする＞。」

例えば、「(その)本は、今日書店で先生が買う。」である。

既述部分の表現形式は、主題と呼ばれ、その事を明示するために＜主題化辞＞が用いられる。＜主題化辞＞には、「は」や「も」などの係助詞が用いられる。日本語の事象表現においては、この主題成分が中心的な役割を担う。事象表現の基となる＜動詞＞が文末となることから、文頭の主題成分が事象構造を予測させる役割を果たす。日本語は、主題成分が事象構造を理解するための明晰性を保証する。日本語は、主題優勢言語であるといわれる。「象は、鼻が長い。」という例文で代表されるハガ構文は、主題優勢性を特徴づける日本語特有の表現形式である。

なお、＜名詞 - 誰＞を主題化した事象表現は、文末の＜名詞 - 何＞と＜動詞＞を入れ替えれば、中国語の事象表現と同じとなる。この対応は、中国語での事象表現を考えるうえで興味深い。中国語においては、英語と同じく主語に既述情報を担わせることが基本となるからである。

次に、英語である。同じく＜名詞 - 何＞を既述であるとすると、既述情報は文頭にという原則に従うと、＜名詞 - 何＞を文頭に移動させねばならない。英語で文頭に置かれるのは主語である。したがって、＜名詞 - 何＞を主語化しなければならない。主語化する方法は、受身形に言い換えることである。

“＜名詞 - 何＞ ＜動詞 - 受動態＞ by ＜名詞 - 誰＞＜前置詞 - 所＞＜何処＞＜前置詞 - 時＞＜何時＞.”

例えば、“The book is bought by a/the teacher in a/the bookstore today.”である。（1）の事象表現では、＜冠詞＞は未定であった。＜名詞＞が共有情報を含めた伝達ずみ情報の中に登場ずみであるか否かによって、定冠詞か不定冠詞が選ばれる。ただし、英語では、登場ずみであるか否かは、想定される読み手の視点によって決められる。

英語では、主語が文頭に来る。したがって、この主語を既述成分とする事象表現がおさまりの良い英語らしい文となる。英語は、主語優勢言語である。主題優勢言語の日本語文を無理やり直訳すると奇妙な英語文となる。例えば、ハガ構文である。「象は、鼻が長い。」を直訳した“As for an elephant, its nose is long.”は、英語としては納まりが悪い。主題を主語化し“An elephant has a long nose.”とするのが英語である。

日本語の知覚動詞文では、知覚主体を陽に表現しない。「富士山が見える。」、「異常音が聞こえる。」などである。知覚主体を主題成分として表現すると「私には、富士山が見える。」、「私には、異常音が聞こえる。」となる。したがって、知覚動詞文の英訳は、主題成分を主語化して“I see Mt. Fuji.”、“I hear an abnormal noise.”となる。

主語優勢を貫くために、英語では無生物主語が多用される。日本語には、本来は、無生物主語はなじまない。しかし、翻訳文の影響から、日本語でも無生物主語が日常化しつつある。また、論文等では、事象の動作主体が著者や実験者など自明すぎて不要な場合が多い。日本語では、事象表現から動作主体となる主体成分を省けばよい。しかし、英語では、動作主体となる主語成分を省くわけにはいかない。そこで、動作対象を主語とする受け身文が多用されることになる。

参考文献

[1] 横井俊夫：産業日本語のガイドライン策定に向けて、Japio YEAR BOOK 2013、一般財団法人日本特許情報機構、pp.302-307（2013年11月）
[2] 横井俊夫：構造化言語 - 知を構造化する言葉の構造化技術 - 、ISeC10周年記念シンポジウム予稿集、pp.25-61（2013年6月）
[3] 木下是雄：理科系の作文技術、中公新書、中央公論新社（1981年1月）
[4] 本田勝一：日本語の作文技術、朝日文庫、朝日新聞出版（1982年2月）
[5] 石黒　圭：よくわかる文章表現の技術Ⅰ　表現・表記編【新版】、明治書院（2012年11月）
[6] 石黒　圭：よくわかる文章表現の技術Ⅱ　文章構成編【新版】、明治書院（2009年11月）
[7] 石黒　圭：よくわかる文章表現の技術Ⅲ　文法編、明治書院（2014年3月）
[8] 石黒　圭：よくわかる文章表現の技術Ⅳ　発想編、明治書院（2006年9月）
[9] 石黒　圭：よくわかる文章表現の技術Ⅴ　文体編、明治書院（2007年10月）
[10] 猪野真理枝、佐野　洋著、馬場　彰監修、英作文なんかこわくない - 日本語の発想でマスターする英文ライティング、東京外国語大学出版会（2011年4月）
[11] 猪野真理枝、佐野　洋著、馬場　彰監修、英作文なんかこわくないⅡ 連体修飾編 - 日本語の発想でマスターする英文ライティング、東京外国語大学出版会（2014年4月）
[12] 松岡　弘監修、庵　功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘著：初級を教える人のための日本語文法ハンドブック、スリーエーネットワーク（2000年5月）
[13] 白川博之監修、庵　功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘著：中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック、スリーエーネットワーク（2001年10月）